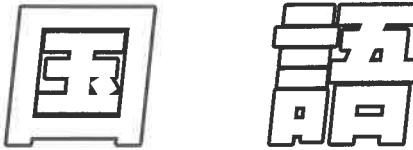


2024年度 入学試験問題



H T J (前期 A)

(50分)

〔注意〕

- 問題は□～□まであります。
- 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
- 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入してください。
- 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入してください。
- 各問題とも特に指定のない限り、句読点(「、」「。」)、記号なども一字に数えます。
- 試験開始の合図があったら、全てのページが揃つているかを確認してください。



次の短文のカタカナを漢字に改めなさい。文字は丁寧に書きなさい。

① チームでイチガンとなつて試合に挑む。

② あやまりをシュウセイする。

③ つまみ食いしたことをハクジヨウした。

④ 投票によつてサイケツされた。

⑤ 本を机の上にツみあげた。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表現を改めたところがあります。)

筆者は、日本に来た留学生に日本語を教えている。

留学生の日本語クラス。今日の練習は、【①】を問う文型「……することがありますか」と、過去の【②】を問う文型「……したことありますか」を、お互いに会話の中で使いこなせるようになります。

留学生が一人ずつ前に立ち、その他の留学生は質問をする。

まずアルゼンチンのステータボが前に立つ。

「ダンスを踊ることがありますか」

「もちろんあります」

「お父さんと踊ることはありますか」

「いいえ、ありません。ダンスは好きな人と踊るものです」

留学生たちは、教師では思いつかないような質問を発し、クラスは笑いに包まれる。

「煙突を掃除することがありますか」

「卵を産んだことがありますか」

「木の上で寝ることができますか」などなど。

しかし、いつも物静かで、個人情報はペールに包まれたままの、タイのリンスーさんが前に立った時には、^③質問の内容が一変した。

「お酒を飲んだことがありますか」

「バーに行つたことがありますか」

「ラーメン屋に一人で入つたことがありますか」

質問のたびに、リンスーさんは、いつもの穏やかな微笑を浮かべては、「いいえ、ありません」を繰り返す。では、子供の時、木に登つたことがありますか

「川で泳いだことがありますか」

「いいえ、ありません。危ないことをすると叱られますから」

リンスーさんがそう答えると、オーストラリアのステイーク君が、「She is brought up with a tender care. 先生、そういう人を『箱入り娘』というんでしょ」と言う。

私もリンスーさんの返事を聞きながら、**A**同じことを考えていた。きっとリンスーさんはタイの良家のお嬢様なのだろうと。「リンスーさんは、『箱入り娘』でいることを、不自由なことと思つたことがありますか」

ちよつとびつくりするような質問がフランスのエレースから出て、みんな一瞬かたずをのんで、リンスーさんの答えを待つ。
いいえ、そう思つたことはありません

リンスーさんは、同じように静かに微笑みながら答える。この答えに教室の中から、どよめきが起きた。
「リンスーさん、ありがとうございます。もう席にかえつてくださいね」

これ以上、リンスーさんに立ち入つた質問は失礼だ。今までは、ユーモラスな質問が続いていたのに、どうして急に雰囲気が変わつたのだろう。**B**、ベールに隠された彼女の内側をのぞいてみたいという気持ちが、留学生の中にあつたのだろう。

日本語では「箱入り娘」という時、マイナス概念^{*がいねん}というより**C**、「大事に育てられた」という意味でプラス概念だ。
平安時代に書かれたとされる『⑦物語』には、次のような文がある。

【⑦】の翁といへる者、かぐや姫を竹の中に得て、うつくしき事かぎりなし、いとをさなければ籠に入れて養ふ……

現代語では「箱入り娘」だが、そのオリジナルは「籠入り娘」のかぐや姫だという説もある。「深窓の令嬢」は日本語ではプラス概念、ところが留学生の中では、この評価は分かれるようだ。リンスーさんの「不自由だと思つたことはない」という答えに、ベトナム、韓国、インドネシアなどアジアの留学生が同意し、それに対してエレースやステイークなど欧米の留学生たちが「それは違う」と反対の意を表明したのだ。

「人間にとつて、自由であることは最も大切なこと。もし『箱入り娘』を良いことだとすれば、きっと次の世代に生まれてきた女性も、その次の世代も、またその次の世代も、不自由を良いことだと思つて、箱の中しか知らないで一生を終えるのではありませんか」

それに対して、インドネシアのジニー君が反論する。
「もし箱の中が平和なら、女人にわざわざ外の争いの多い世界を見せる必要はないと思います」

ジニー君は熱心なイスラム教徒だ。彼の言葉の背景には、イスラム教の教えがあるのかもしれない。

「今日の文型の練習の授業は、時間が来たので終わりにします。でも、この後このディスカッションを続けるのなら、教室に残つてもいいですよ。リンスーさん、どうぞ、お昼ごはんにしてくださいね」

私の言葉に席を立つ留学生は一人もいない。リンスーさんまでが、静かに座つてゐる。「話したい」という彼らの気持ちが、教室の中に不思議なエネルギーを生み出している。こういう場合は、エネルギーを閉じ込めないで、表に発散させた方がいい。

エレーヌが続ける。

「先生、* ジャン・ジャック・ルソーの次の言葉をどう思いますか。——人間は、生まれた時から自由である。しかし、いたるところで鎖に繋がれている——これはリンスーさんだけの問題ではなく、人間というものを考えてみても、男の人より女のの方が『鎖』に繋がれる確率が高いと思うのです」

このへんになると、エレーヌはフランス語、英語、日本語が入りまじり、クラスの留学生に彼女の主張がどのくらい通じているかは疑問だ。

「ルネ・クレールという監督、先生もご存じですよね。彼の作った映画で、刑務所を逃げた二人の人が『自由が一番』と歌うところがあります。もう古い映画ですが、私はそれを何回も見ました。そして、今でも、ルネ・クレールのあの映画は、私を一番インフルエンスした（影響を与えた）と思っています」

「ああ、その映画なら私も見ました。日本語の題名は『自由を我等に』だつたと思います」

エレーヌがフランス語で歌う。こんな意味の歌だ。

——自由が一番、人間は刑務所や規則や法律を作つた。労働や会社を、そして家庭や牢屋までつくつた。自由であること、それが人生を美しく豊かにするんだ。もう待つていてることはできないのだよ……

エレーヌの歌声に、しばしの間、クラスはシーヌとなつた。その沈黙を破つて、リンスーさんが言う。

〔⑧〕刑務所は犯罪者のための箱、規則はルール違反をする人のための箱、会社は労働のための箱。でも、家庭は愛の箱。もしこれがなければ、自由の意味もありません」

リンスーさんの言う通り、自由とは何かと思う。「箱入り娘」と言われた彼女も、その箱を「愛の箱」というのなら、彼女の精神は自由だということになる。それを苦痛と感じる時に、「箱」は「鎖」になるのではないだろうか。

(注) *概念……おおまかな意味内容。

*ジャン・ジャック・ルソー……十八世紀フランスの思想家。

問一 空欄①・②に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|--------|------|--------|------|
| ア ① 習慣 | ② 経験 | イ ① 経験 | ② 習慣 |
| 工 ① 習慣 | ② 希望 | オ ① 未来 | ② 習慣 |

問二 空欄A～Cに入る言葉として最も適当なものを次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------|--------|-------|-------|--------|
| ア さらに | イ なぜなら | ウ まさに | エ むしろ | オ おそらく |
|-------|--------|-------|-------|--------|

問三 傍線部③「質問の内容が一変した」とあるが、どう変わったのですか。その説明として最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|--|--|---|---|
| ア 仲の良さをうかがわせるユーモラスな質問だったのが、険悪さを感じさせるようなぎこちない質問になつた。 | イ 誰でも答えられるような簡単な質問だったのが、答えるのに時間がかかるような深刻な質問になつた。 | ウ 教師には思いつかないような子供らしい質問だったのが、大人が考えるような本質にせまる質問になつた。 | エ 笑いが生じるような和やかな雰囲気の質問だったのが、ふだんの行動を探ろうとするような興味本位の質問になつた。 | オ 練習の型どおりの習慣を問う質問だったのが、単に聞きたいことを聞くというような型から外れた質問になつた。 |
|---|--|--|---|---|

問四 傍線部④「箱入り娘」とは、どういう娘のことですか。それを説明した次の文の空欄に本文中の八字の言葉を入れて答えなさい。

家庭で 娘。

問五 傍線部⑤「いいえ、そう思つたことはありません」とあるが、その答えに、ほかの留学生たちは具体的にどのような反応を示しましたか。解答欄に合うように、本文中の語句を用いて三十字以内でまとめて答えなさい。

リンスーさんの答えに 。

問六 傍線部⑥「平安時代に書かれた『籠に入れて養ふ……』について、次の各問いに答えなさい。

本文中の二ヵ所の空欄⑦には同じ言葉が入ります。漢字二字で答えなさい。

(2) (1) 筆者が『⑦』物語の一節を引用したのは何のためですか。最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 「箱入り娘」というのは、大げさな表現であり、物語でのみ使われる言葉であることを確認するため。
イ 「箱入り娘」というのは、その由来が物語を含めて諸説あるぐらい、なじみ深い言葉であることを示すため。
ウ 「箱入り娘」というのは、日本では古くから肯定的な意味合いで用いられる言葉であつたということを示すため。
エ 「箱入り娘」というのは、あくまでも現代語で、そもそも「籠」であつたものが変化したものだということを強調するため。
オ 「箱入り娘」というのは、日本の物語に由来を持つ言葉で、そもそも海外にはない発想だということを確認するため。

問七 傍線部⑧「刑務所は犯罪者のための箱～自由の意味もありません」というリンスーさんの言葉を聞いて、筆者はどのように考えましたか。解答欄に合うように十五字以内で答えなさい。

リンスーさんは、、精神的に自由だ。

問八 本文中のエレーヌの考えをまとめたものとして、最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 人は生まれたときは自由であるが、人生のあらゆる場面で鎖につながれる。罪を犯し、刑務所に入れられたとしても、自由を求めることが大切だ。

イ 人間にとつて自由であることは、最も大切であるが、実際はいたるところで鎖につながれている。特に女の人は家庭という鎖もあつてより不自由である。

ウ 男の人は、会社という鎖にしばられて不自由である。会社から抜け出し、自由であることが人生を美しく、豊かにするのである。

問九

本文の内容としてふさわしくないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア インドネシアのジニー君の言葉には、イスラム教の教えが影響しているかもしれないと筆者は考えている。
- イ 日本語の会話の文型を練習する授業で、議論が白熱し、留学生の「話したい」というエネルギーが高まつた。
- ウ たとえ家庭という箱であれ、それを苦痛に感じたとき「箱」が「鎖」になると筆者は考えている。
- エ 「自由」についての考え方の違いから、リンスーさんとエレーヌは心中でお互いを嫌っている。
- オ リンスーさんは、物静かでいつも穏やかな微笑を浮かべるが、自分の考えはしっかりと表すことができる。

- 工 刑務所や会社、規則といった箱がなければ、人間は自由過ぎてだめになる。家庭も箱の一種であり、人を育む大事な場所であることを認めるべきだ。
- オ 女の人にわざわざ外の争いの多い世界を見せる必要はない。安全で安心な箱の中にいるほうが女人にとって幸せであるに違いない。

三

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。(本文には一部省略したところと、表現を改めたところがあります。)

飛び出すか、それとも今のサラリーのために耐え続けて働くか。

そんなふうに悶々としていた夏、行内で作った自転車サークルで、合宿と称して逗子の海にいくことになった。自転車サークルだというのに誰も愛車にまたがっていないのは、真夏だったからだ。冬に走るものらしいが、夏はもつとハードになる。根性サークルではなかつたから、シーズンオフには愛車を駆らずに集まる。

幸子は、健一たちのサークルがよく使っている、ショップの店員をしていた。とは言え、父親の店で社会勉強というやつだった。都内に七店舗を構えるオーナーの令嬢ということになる。もつとも、いつも手を自転車の油で汚し、すっかり日焼けした姿は令嬢という言葉からはほど遠く、健一もそれと意識したことさえなかつた。ただ、かわいい子だとしか考えていなかつた。

だからこそ彼女の前で、自然にしょげてみせることもできたのだ。

「駄目だな俺は。へこんだよ」

支店のそばに住んでいた健一は、その夏のバーベキュー大会を取り仕切つた。コンロやキャンプ用の椅子を借りたり、食材やコークスの用意をしたりと、押しつけられたわけでもないのにすべて一人でやつた。出世コースから外れてしまつた自分の力を、そんなことで再確認したがつたのかもしれない。

「……まさか、海岸でバーベキュー禁止だなんて思わなかつた。みんなに迷惑かけちやつて、ほんとごめん。夜の花火も駄目だなんて、もう最悪だ」

健一の育つた田舎では、そんな決まりなどなかつた。大学時代の夏はずつと故郷で過ごしていただため、都会のそばの海というものをほとんど知らない。思えば、海水浴客の多いこの季に、逗子の浜を訪れたのさえ初めてだつた。それほど仕事に忙殺されていた。なのに、出世コースからは弾かれた――。 a と怒りがこみ上げてきつたが、しかし長続きしなかつた。それは八月の中旬すぎで、海風の中とときどき、冷たい秋のひと筋が潜んでいたせいだ。

夏が終わるよとささやく風が、怒りを遠くへやつてしまつ。ふがいなさだけが、心に残つた。

「こんな場所でバーベキューだもん、そりやあみんな怒るわ。子供連れもいるのにさあ、ご近所さんはこんなだし」

すぐそばには、青いビニールシートでできた家がたくさん並んでいた。③ホーミレスたちだ。彼らは道路と河口の間にあるコンクリー

トの段差、海でもなく道でもない河でもないグレーブーンで暮らしていた。そもそも、そういう場所だからこそ何とかバーベキューの体裁だけは整えられたのである。浜辺でバーベキュー禁止という決まりをかいくぐろうと、セーリング教室のインストラクターに教えてもらつて、からうじてお目こぼしにあづかつたわけだ。

海は何とかのぞけるものの、どう見てもここは河口であり、地面は硬く、陽当たりも悪い。サークルの連中は、食事を終えると逃げるよう浜へむかつてしまつた。彼らの帰りを待ち、鉄板で焼きそばを焼いているのは健一と幸子だけだが、その頃にはすっかり冷めてしまうだろう。

「そんなこと言つたつて、こつちのほうがお邪魔させてもらつてるんだもん、仕方ないじやん」

新しいコーケスの火力は強すぎて、焼きそばが焦げついてしまいそうだつた。麵をほぐすために水を回したかつたが、ミネラルウォーターの残りも少ない。海の家へ買い足しにいこうかと健一は相談かけたのだけど、幸子は、これでいいからと余つたワインを振りかけて済ませた。

「そんなことして、味、大丈夫かな」

「同じ同じ。どうせ最後にソースかけるんだから」

シユワーッと赤い液体が鉄板の上で弾けた。高級な鉄板焼きでもやつてているようだ。

「やつぱり、何だか悪い」

「誰に悪いの」

「だから、ご近所さんに」

健一が、ホームレスたちのそばでバーベキューをするのを嫌がつていたのは、景観が悪いからではなく、食うや食わざの生活をしているだろう彼らの隣で、じゅうじゅうと肉を焼き、ビールを飲んで騒ぎ、焼きそばにワインをぶちまけ、いろんな食べ残しをビニールにまとめて捨ててしまつのが嫌なのだった。

「あの人たちがいると、非難されてるみたいで嫌なんだ。俺はただ、楽しみたいだけなのにさあ」

それに、ずっとこつちに背を向けて座つてゐるんだもん、無言の圧力だよ。そう言うと、幸子は調理の手をしばし休めた。

「健ちゃんつて、変なこと考へるね。逆でしよう。あの人たちは、私たちに迷惑かけないようにあつちむいてるんじゃないの？」存在を消してゐるんじゃない。だから私、意識もしなかつたよ」

「そうかなあ。煙もむこうにいくし、怒つてゐんじやないのかな」

幸子は、ぶつと噴き出す。これだから男は、と笑つた。

「健ちゃんつて中途半端に気が弱くて、中途半端に優しいね。でも、それじゃ駄目だよ」

そして彼女はワインと、誰も飲もうとしなかつたウイスキーを手にした。余つた食材やおつまみも手に取る。まさかとは思つたが、彼女はそれを持つて彼らのほうへ□bと歩き出した。焼きそばの様子を見ていくなくてはいけなかつたが、健一も慌ててうしろからついていった。

彼女は、一番立派そうな家を選んでいるらしかつた。目星をつけると、路上からビニールシートの屋根に声をかけた。呼ばれて中から出てきた男は、右の前歯がなかつた。幸子は彼に、そこでバーベキューして迷惑だらうけど、これはお裾分けですと言つて酒と食べ物を差し出した。

「よかつたら、みんなで」

今にも男が怒り出すのではないかと気が気ではなかつた。お前らにめんでもらう筋合はねえ、馬鹿にすんなど怒鳴られそうで。ところが意に反し、男は素直にすべて受け取ると屈託のない笑顔を見せた。

「悪いねえ。あ、それとさ、バーベキューで出た灰は、地面に埋めると監視員がうるさいからね、持つて帰つたほうがいいよ。面倒臭かつたら、俺、やつといてやろうか。終わつたら持つてきな」

「ありがと。ついでにコーケスも余りそうだけど、使うことある？ 来年までとつておいてもしけつちやうし」

「おう、もらう」

だつたら俺たちも今夜はバーベキューにすつかなと、男がふざけてみせる。幸子も、それはいい考えだねと笑つた。

鉄板のところに戻ると、焼きそばはすつかり焦げついていた。まだ大丈夫そうなところをより分け、二人ですする。ワインを振りかけたせいで、高級そうな、しかし焼きそばに高級さを求めるところがかえつて貧乏くさいような、まとめると男の味だつた。えばつてゐるくせに、情けなくて。

「サツチは大胆なところあるわ」

ちらと川べりの家に目をやり、健一は言つた。そろそろ空が染まつてきて、陽光が海とブルーシートの屋根にたまつてゐる。それこそワインみたいに、美しい赤をしていた。

「あのね。男が中途半端なのつて一番いけないんだよ。勇気も優しさも、勝負どころで氣前よく使わないと。そうしないと、ぐじぐじするだけで何もできなくなるもん」

「男と女でわかるのって、やだな」

「だったら、人間すべて！」

「彼女はいつものようにかんしゃくを起こした。けれども健一には慣れっこだったので、快く眺めた。

そして不意に、銀行はやはり辞めたほうがいいのかもしれない、と思つた。そうだ、中途半端はよくない。いつそ小さいながらも店でも始めて、一 ⑥ 一 の主^{おも}にでもなつてみるか。

いや、待て。今、自分にそんない風が吹いてるのだろうか。転職して失敗し、結局はあのまま銀行に残つていたらなど後悔するのが関^{せき}の山ではないだろうか。大学の同期たちにしたつて、転職で成功しているやつは少ない。成功した連中は必ず同窓会に顔を出すものだけれど、次第に姿を見なくなつたじゃないか。

よし、それなら手始めに確かめてみよう。^⑦俺に吹いている風を確かめてみよう。

「なるほど、サッチの言うことも一理ある」

「でしょ」

「じゃあ俺も勝負してみるか。ごほん。ええと」

俺、サッチのこと好きだわ。健一は開けっぴろげに言つた。

「つきあつてくれたら、お前の言うこと全部信じる」

いつも動じない彼女だったのに、そのときばかりは取り乱した。顔を赤くし、さらに頬^{ほお}の赤が夕日で倍増された。どうしてこんなな^{こうか}きに言うの、こんな、焦げた焼きそば食べてると怒り出す。

怒りながら、照れていた。はにかみながら、怒つていた。

「どうして、私みたいなのがいいの。もー、どうするの！」

あ、風は吹いてるんだと健一は思つた。

(伊藤たかみ『誰かと暮らすということ』所収「サッチの風」より)

(注) *サラリーマン給料。

*悶々と……もだえ苦しむ様子。

*行内……銀行の中。健一は銀行に勤めている。

*逗子……神奈川県南東部の市。

*コークス……バーベキューに用いる、石炭から作った燃料。

*ホームレス……決まった住居を持たずに、公園や路上などで生活する人。

*届託のない……何も気にしていない様子の。

*闇の山……せいぜいのところ。

問一 空欄a・bに入る言葉として最も適当なものを次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| ア めきめき | イ ずんずん | ウ こつこつ |
| エ くらくら | オ ふつふつ | カ ざわざわ |

問二 傍線部①について「飛び出す」とは、この場合、具体的にはどうすることですか。それを説明した次の文の空欄に本文中の二字を入れて答えなさい。

銀行から□する」と。

問三 傍線部②「自然にしょげてみせることもできた」からわかる、健一の幸子に対する態度として最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|-----------------------|-------------------------|--------------------|
| ア あえて自然にみせかける、意図的な態度。 | イ 好かれるようにふるまう、陽気な態度。 | ウ ありのままを見せる、素直な態度。 |
| エ 相手の気持ちをだます、意地悪な態度。 | オ つつみかくさず弱音をはく、投げやりな態度。 | |

問四 傍線部③「ホームレスたち」が座っている様子を、健一と幸子はそれぞれどのように思いましたか。それを説明した次の文の空欄A～Cに入る言葉を指定された字数で本文中より探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

健一たちに A(四字) て座っている様子から、健一は自分たちに對する B(五字) を感じていたが、幸子は、彼らが自分たちに C(六字) よう存在を消していると思っている。

問五 傍線部④「お目こぼしにあずかった」とは、ではどういう意味ですか。最も適當なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 大目に見てもらつた

イ 時間に間に合つた

ウ 目星がついた

エ 場所を譲つてもらつた

オ 決まりをやぶつた

問六 傍線部⑤「そろそろ赤をしていた」について、この情景描写が登場人物の気持ちと深くかかわっていくことがわかる一文を、

これよりのちの本文中から抜き出し、はじめの五字で答えなさい。

問七 空欄⑥に入る四字熟語として、最も適當なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 一朝一夕 イ 一宿一飯 ウ 一言一句 エ 一国一城 オ 一木一草

問八 傍線部⑦「俺に吹いている風を確かめてみよう」とあるが、具体的にどうすることですか。四十字以内で答えなさい。

問九 本文の登場人物や表現について説明したものとして、ふさわしくないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「なのに、出世コースからは弾かれた——。」では、「——」により、健一のやりきれない思いが強調されている。

イ 「夏が終わるよとささやく風が、怒りを遠くへやつてしまふ」では、擬人法が用いられ、健一の心の動きが表現されている。

ウ 幸子はホームレスの人たちにも気軽に声をかけるような、物怖じしない、行動力のある人物として描かれている。

エ バーベキューの際の、健一と幸子とのやりとりや二人の心情が、語り手の視点から客観的に描かれている。

オ 「あ、風は吹いてるんだと健一は思った」は、健一が幸子の自分への好意を感じ取れたことが表現されている。

